

# 緑のダンス

野口津義夫

時空を超えたロマン

15年前に忽然と姿を消した天使のような女性を描いた『緑のダンス』（中編）と、65歳の老人が40年前に旅先で体験した不思議な物語『天と地のタペストリー』（短編）の二編を収録。

もくじ

はじめに . . . . . 2

緑のダンス . . . . . 4

天と地のタペストリー . . . . . 100

あとがき . . . . . 134

## はじめに

作品が時を越え、場所を超えるとする場合、いわゆる普遍性を有すると言うのと同義になる。別に私の作品がそうだと言っているのではない。私はそんなに厚かましい人間ではない。ただ、作品の中にこうした素材を取り入れれば、ある種の面白みが出て来るのは事実である。

さて、小説を書くにあたっての私の立場は、物語と小説という二つの文学形態の垣根を取り払って、形式から解放された思考や想像に基づいて、自由な作品を書いてみるということである。その際、浪漫性をあまりにも追求すれば小説から食み出てリアリティーがなくなってしまう、だからといって写実性をあまりにも追求すれば夢がなくなり情趣の欠いた硬い小説と化してしまう。したがって、こうした私の試みは、物語と小説という二つの文学形態を不必要に分離しないという、従来の次元と異なる次元を持つと同時に、この二つの形態を同次元で捉えてみるということである。

そもそも本来の小説といえどもフィクションなのだから、たとえ浪漫性や物語性の度合いの強い小説になったとしても、その中に何か人間や人生や世界についての真実が含まれているのであれば、読み応えのある小説と言ってもいいのではないか。

そして、この二つの文学的特性の調和と統一を図るためのもう一つの私の試みは、作品の映像化の導入である。勿論これは実際に作品を映像化するというのではなく、作品を読んだ時に、小説という芸術形態を取りながらも、まるで実際に映画を見ているかのように、映像が目に見え

んで来るように描写するということである。

二つの文学形態の壁を打破するというだけでも大変な課題であるのに、こうした異なる困難がまた現れるところに、私の執筆の皮肉な苦悩があるわけだが、私は常にこれらの困難を突破しようとして書いているつもりである。

それにしても、時空を越えるということは、書く側からしても読む側からしても何と夢が多いのだろうか。

緑のダンス

## 序

幸福の杜のエッセンスを胸一杯に吸い込んで帰宅した年配の夫婦の下に、緑色の封筒に入った一通の手紙が届いていた。

「あなた、見て！ 来てるわよ！」

「本当だ！ 今年もまた、そんな季節になったんだね」

毎年、新緑の頃に、十五年前に忽然と姿を消した天使のような女性から届く手紙が、まだ続いていく。

一体、彼女はどこにいるのだろうか。一年に一度だけであったが、こうして手紙が届くということは、まだ彼女がどこかで元気に暮らしている証拠でもあった。

『万一来なくなったら、どうしよう』

清らかな女性からの一方的な手紙に、嬉しさの半面、不安が彼等の脳裏を過った。

『そんなことはないさ。彼女、私達よりずっと若いんだから』

『私達が死ぬまで、きつと書き続けてくれるわ』

手紙の内容はいつものように、世界や人間や自分自身の内面について、彼女が洞察した諸々の考えが書き記されていた。そのどれも、常人の及びもつかない生々しい真実で満ち溢れていた。

「あの清楚な女性も、もう今年で三十九才になるのか……」

「会いたいわ……」

二人の目頭に熱いものが込み上げてきた。

十五年前――。

「大宮公園は春の味だね」

わけの分からない言葉が戸田尽平の口から突いて出た。彼を取り巻く地面に散り舞った桜の花片が、折からの心地よい風に乗って彼の頬にしばらく吹き当たった。前方に池が見える。桜祭りもこの日が最後とあつて、親子づれ、アベックなどがボートに乗ったり、バドミントンをしたりしている姿が散見された。

「いいねえ」

ワンカツプの蓋を開けて、楽しそうにして尽平は呟いた。

少年が二人、自転車を引いて池の辺から尽平の座っているベンチの方へ上つて来る。彼の左方に、若い男女が抱き合つて墓座の上に寝ている。少年の一人が、もう一人に何事か囁いた。

「あっははははは」

耳打ちされた少年は大声で笑い出した。

「あはははは」

尽平も彼らの姿を見送りながら笑った。

「いいねえ」

またそう言つて、尽平はワンカップの残りの酒を飲み干した。

一時間ほどして、先ほどとは逆向きに、尽平の後方から花吹雪と共に快適な風が下りて来た。

「不思議だねえ」

その風を受けて、尽平は大宮公園駅の駅前のスーパから買って来たイカの足をかじつて、三杯目のワンカップの蓋を開けて言った。周囲の風景が、幼い頃見た古里の風景のように彼の瞳に映った。

「すいません。シャッターを押してくれませんか」

トイレに立った後、元のベンチに座ろうとした時、尽平の耳に男の声が聞こえた。

「はい」

酔いの目で尽平は慇懃に応えた。

小学校の頃、素直ないい子だった彼は、子供の頃に返ったかのように愛想よく機敏に振舞った。ばちと、シャッターが見ず知らずの害のない男の姿を捕らえた。

「すいませんね」

「いいえ」

男は立ち去った。

「馬鹿め！ こんな俺みたいな酔っ払いに頼む奴があるか」

尽平は悲しくなった。

「もっといい所で撮ればいいのに……」

池と反対側の博物館の近くの舗道の殺風景な辺りを振り返って、尽平は男の美的センスのなさに呆れて言った。

「たった一人で、こんな所で、馬鹿！」

彼は自分と同等の憐れみをその男に覚えた。

再び尽平の脳裏に幼い頃の記憶が甦った。美しい雪国の城下町、秋田市……。

「尽平ちゃあーん」

かけっこの速い色白の美男だった尽平に、林檎のほっぺの女の子が雪玉を投げた。校舎の二階近くまで積もった雪の上で、足を奪われながらも尽平は素早く身をかわし、少女目がけて雪玉の応酬をした。

「あーん、あーん……」

投げた瞬間、バランスを失って積雪の上にもんどりを打って倒れた尽平の耳に、女の子の泣き声が聞こえてきた。彼の投げた雪玉の一発が、少女の顔に当たったのである。

「ごめん、ごめんよ」

頬に伝わる柔らかな雪の感触の中で、尽平は少女に謝った。

五時——。我に返った尽平は徐にベンチを立ち、氷川神社の方に歩いて行った。参道で男がリヤカーで飴を売っていた。昔ながらの飴細工——。ねずみ、へび、うし、ひつじ、さる、いぬ、三百

続きは  
完成版で  
お楽しみ下さい。